

メールレター（75）

夏がくれば。。

夏が来たかと思えば、湿度の高い猛暑。天気との闘いは骨がおれます。

6月24日はケベック州祝日、7月1日はカナダの建国記念日の祝日のため、土、日、月（祭日の土曜日の振り替え）と週末の休みが繰り返され、2週間に渡りお祭り気分、バカンス気分です。ケベック州祝日は、フランス系のケベック州を強調し祝う行事が派手に行われました。

1週間後のカナダ建国記念日は、それに対抗するかのようになり、国の多様性を強調する行事がオタワで行われました。コロナ禍から解き放たれ、今年はどちらがどれだけ派手に観客を集められるか、様々の行事で張り合っていました。さて、どちらに軍配があがったのでしょうか。。。

ドリトル先生の家族は、フレデリックトンに住む次男のモンリオール訪問の都合に合わせて7月1日の夜、家族14人で大集合をすることになりました。次男は息子をフランスの嫁の実家の祖父母に2週間預けることになっていて、フランス行きの飛行機に息子を乗せた後、ドリトル先生の家に残りの家族でやってきました。長男一家、娘の一家もそれに合わせてやってきましたので、家族集合の大パーティーになりました。ドリトル先生には子供達全員と久々に会え、飲んだり食べたり、しゃべったり、ゆったりと時の過ぎる楽しい夕べでした。マダム田中は、いけばなのお稽古の合間に腕をまくり上げ、それぞれの子供の好みも考え、美味しい食卓を用意すべく、三日間ほど料理に集中しておりました。難しいのは走り回る二人の二歳児の孫娘たちをどうこの夕べのなかで遊ばせ、退屈させないようにするかでした。娘に、塗り絵やはり絵やおもちゃを二人分用意して貰い、何とか時間を過ごさせる工夫もしておきました。こういう時に頼みになるのはやはり娘です。元テニスプレーヤーの長男の嫁の頭の中にあるのは二歳の娘でなくテニスのラケットのみ、次男の嫁の頭の中にあるのはカリブの海でのバカンスのみだろうと思いを巡らせ、やりくりしながらの夕べでした。

ワントンスープ、寿司二桶、春巻き、餃子、シュウマイ、焼きそば、パエリア、北京ダッグセット、鶏の照り焼き、焼き豚、南蛮風揚げ出しナス、トマトのサラダ、キュウリの酢の物等の数種類の野菜料理とデザートをテーブル一杯に並べ、ビュッフェスタイルで好きな物をもって食べるようにしました。小さな子供がいるので、適当に食べ始めてもらい、次男の到着を待ってシャンペンで乾杯でした。孫たちも成長し、それぞれの運命を背負い、これからどうなって

いくのか、色々と思いが巡ります。二人の2歳の孫娘達、二人の9歳の孫娘達はそれぞれ、性格があまりにも対象的でまずびっくりです。9歳の二人の孫娘の一人（フローレンス）は、背が高くブロンドで青い目の超美人。頭も良さそうなのに何故か落ち着きがなく、常に人の注意をひこうとお茶らけてみたり。度外れのいたずらをしてみたりします。うるさがられ、いつのまにか人に完全に無視されてしまいます。思春期になったら自信がなくなって落ち込むかも。。もう一人の9歳の孫娘（エリーズ）は小ぶりで、余り話さず、動じず、人の気をひくこともなく、几帳面なマイペース。研究者に向いているかも。。さて二人の2歳の孫娘達はこのと、娘の娘（クロエ）は社交的で楽観的で笑ってばかりいる明るい子。長男の2歳の娘（ビクトリア）は笑うよりふてくされて泣き叫ぶ方が多い子。ビクトリアは5人目の子供で、他の子供達とは年が離れている上に母親が忙しいので自分の意志を伝えるのに必死で、泣いて注意をひくしかないと決めているようです。ビクトリアはテーブルを一回りすると、デザートコーナーの子供用のアイスクリームのコーンをみつけると、

「これー」

と指さし泣き叫んでいました。

「ほかの物をきちんと食べてからよ。 後で。」

お寿司を一口ほおりこむと走って戻ってきて、

「これー」

「パパに食べていいかどうか聞いて」

「いいよ。今夜は特別だ」

「じゃ、好きな色（3種類あります）のコーンをとって、冷蔵庫まで出発進行」

もう一直線です。マダム田中はマダムアイスクリームと化し、アイスクリームを入れてあげる係になりました。このアイスクリームコーナーは毎回好評です。

「ばあーば、クロエも」

クロエもピンクのコーンを持ってきて、差し出します。他の子供達も続々。

「一列に整列。順番だからね。」

マダムアイスクリームの仕事はなかなか終わりません。大人用のデザートには、季節の果物のフルーツサラダとイルフロッター（浮島とでも言えばよいのでしょうか。カスタードクレー

ムのソースの上に島にみたてて泡立てた卵の白身（お湯に通し固めてある）が浮かび、その上にカラメルがかかり少し固まっています。甘くなく美味です）を用意しました。

「おばあちゃん、卵焼き美味しかったよ。」

とは、長男の長男のアレキサンドルの一言。和風の甘い卵焼きが好きで、この子のために良く作ります。12歳なのに、170センチもあるのっぼ。くるくるにカールした天然パーマの髪の毛がちょこっと乗っている感じです。この子はとてもかわいいのです。その夜は何だかとてもリラックスしていました。

「僕ね、あれも好きなんだ。ほら、丸いごはんの塊り中に何か入ったやつ」

どうやら、おにぎりの事らしい。そういえば、不器用なマダム田中のおにぎりは何故か丸みをおびています。

「オーケー。今度はそれも作るわね。」

卵焼きにおにぎりに鮭の握り寿司、これが少なくとも食べたい、そういうメッセージのようです。マダム田中はやはり忙しい。夕べもやがて終わり、それぞれが帰路につきました。

（いけばな活動も一段落したし、家族の大集合もクリアしたし。これでゆっくりできる）

とその夜更けに思ったのですが、読みが甘かったのです。2日後に、ドリトル先生の前妻の家で預かっている次男の長女エリーズが我が家に遊びにやってきたのです。ドリトル先生がパーティーの時に

「おじいちゃんたちと出かける気がある。」

と聞くやいなや、

「行く。何時？」

大集合の時にはおとなしかったエリーズは一人になると変身したかのように、おしゃべりになり、大笑いをし、動き周り、マダム田中の目は四方八方忙しかったのです。乗りに乗っていました。船に連れていくと、船の中をあちこち探検し、船ででかけると、水面を眺めては魚を探し、食事に連れていくと信じられない量のピザを食べていました。夕立にあい、船の中でなりをひそめていると、突然降り始めた激しい雨音に大喜びし、これがあの大人しいエリーズなの

か、啞然とするばかりでした。船からドリトル先生の家への帰路で美味しそうなアイスクリーム屋さんを見つけ、寄ることにしました。

「アイスクリーム食べに行こう。二段重ねでも三段重ねでも好きなだけ食べていいわよ。リミット無し。」

「好きなだけ？三つでも四つでもいいの？」

「勿論。」

エリーズの目がきらきら輝き始め、大きなカップに二段重ねのアイスクリームを注文していました。幸せそうです。ドリトル先生の家に戻ると、

「和子ばあちゃん、ショッピングに行きたい。」

「ショッピングって、ここはお土産屋さんばかりよ。港で散歩とか、公園で走り回るとかじゃなくてショッピング。随分、婆あ趣味ねえ。」

「お土産って何のための物なの？」

「訪ねたところを思いだすためなのよ。」

しばらくあちこち見た後、あるお店のマスコット売り場で立ち止まりました。何やら気にいったものが見つかってようでした。

「これほしい？」

狙いは、お店をみながら、何か買ってもらう魂胆だったようです。考えてみると、フレデリックトンの家のあたりは、木や草以外は何もなく、人通りもないど田舎。オールドモンリオールのような、混雑した人の波もなければ、ずーっと立ち並ぶお店もないので、好奇心そそられ、刺激的だったのでしょうか。このショッピング散歩の間エリーズのしゃっくりが止まらず、

「どうしたの、お水でも飲む？」

「大丈夫。面白くて、面白くて。笑いすぎるとしゃっくりがでるだけだから。」

そう言われてみれば、歩く度に笑い、お店に入る度に笑っていました。やがて夕暮れ、祖母の家に送り届けましたが、

「今度は何時、迎えに来てくれる？」

マダム田中の疲れがどーっとこの一言で激しくなりました。ドリトル先生曰く、

「このショッピング散歩は、エリーズには忘れられないひと時になるかもしれないね。自由なんだよ、君とのひと時は。」

何だか夏休みは長い疲れるものになりそうです。